すず と 逍遥館長 それぞれの帰り道、のこころ

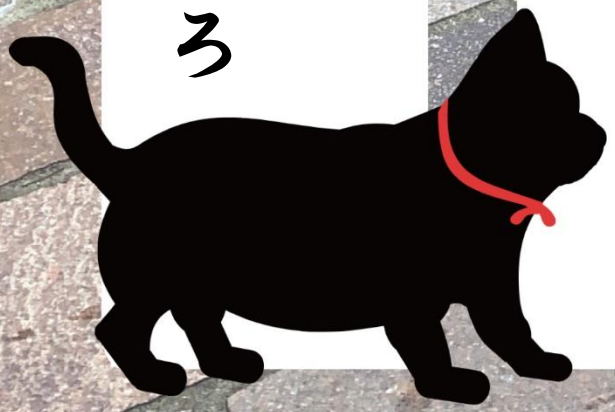
11月 28 日 逍遥

ところで、話しは少し変わりますが、そもそも雌猫の行動半径って、雄猫の十分の一ぐらいしかないのです。ですから、ついつい私学校跡あたりまで遠出してしまった今日の散歩って、雌猫のワタシにとってはもう殆ど無謀に近い大冒険。ですから、急いで西郷銅像近くのお店まで帰らなければ。幸いこのあたりは、昔の鹿児島城跡の面影を残す高い石垣が続くので、石垣の上を伝うのが得意な猫のワタシにとっては、とても都合のいい帰り道なのです。

悠久の時の流れの中で、人間達がそれぞれに刻んできた「戦いの記憶」。今、ワタシが、石垣の上から見下ろす先には、国道沿いの歩道の脇の水路で戯れに水面を乱す鯉たちの群れ。そして、落ちる陽を追いかけるかのように家路を急ぐ人や車の流れ・・・そんな人間達それぞれの、今日の喜びも、そして哀しみも、明日になればまた、物語に変わってしまうのでしょうか。

山茶花の香る帰り道一つ。逍遥館長さんが、またしみじみ呟いています。

「人間の強さも、そして弱さも、結局、そこにあるのかなあ」



次回「すず 人間の子供達の気持ちが分かる、のこころ」